『中国地区英語教育学会研究紀要』No.17 (1987.9.1)

Non-native Englishの聴解能力に関する研究

－大学生のＮＮＥ聴解力とComprehensibilityに対する感じ方の関係について－

松山商科大学　波多野　五　三

Ⅰ．研究の目的

国際共通語としての英語によるコミュニケーションにおいては，英語運用の主体はＮＮＳ（non-native speakers of English）であり，ＮＮＳによるＮＮＥ（non-native English）の聴解が，情報交換の基盤を成していると言っても過言ではない。そこで，本稿においては，ＮＮＳ／ＮＮＳ interactionにおける最も重要な言語能力は聴解力であるという見地から，日本人大学生を対象にした聴解力テストの結果をもとに，日本人英語学習者によるＮＮＥの聴解に関わる要因とその特性を考察することを目的とする。

Ⅱ．聴解に関わる要因

ＮＮＥの各変種の音声的，統語的，社会言語的特性をひとまとめにして考えるのは，ＮＥ（Native English）の方言差を比較・対照する場合と同様に，多くの点で問題を含んでいる。たとえば，ＥＦＬ国とＥＳＬ国とでは，言語政策，目標言語の社会的・教育的価値，言語使用などの点で顕著な差異がある。その結果，カリキュラム編成はいうまでもなく，英語教育実践のあらゆるレベルで質的な優劣が生じ，ＴＯＥＦＬの得点差にみられるように，ＥＳＬ国出身者の総合的な英語能力はＥＦＬ国のそれに比較して優れている（竹蓋，1982）。従って，個々の変種の特質を識別することなく，非母国語話者による英語をＮＮＥというカテゴリーで一般化することは社会言語学的見地からも危険である。しかしながら，Received Pronunciationや General Americanを特定の規範とみなすならば，ＮＮＥは，究極的にはＮＥからの逸脱に特徴付けられた中間言語である。

それでは，ＮＮＳの聴解にはどのような要因が関係しているのであろうか。

まず，Gass and Varonis (1984：65－89) は，ミシガン大学のアメリカ人学生142名を対象とした実験で，ＮＮＥに対する親密度が聴解に与える影響を調査し，その結果を以下の４項目に概括している。

(1) Familiarity with the topic of discourse greatly facilitates comprehension.
(2) Familiarity with nonnative speech in general facilitates comprehension.
(3) Familiarity with a particular nonnative accent facilitates comprehension of the speech of another nonnative of that language background.
(4) Familiarity with a particular nonnative speaker facilitates comprehension of that person's speech.

次に，発話速度が聴解度に及ぼす影響を調査した町田（1979）は，日本人大学生252名を対象にした実験結果から，英語の発話速度を0.6倍に減速した場合理解度は高まらないが，1.5倍に速めた場合には理解度が落ちると報告している。

これに対し，Kelch (1985) は，ハワイ大学の留学生26名を対象にしたディクテーションの結果から，ＮＮＳによるＮＥの聴解に関して，発話速度を0.65～0.7倍に減速した場合理解度が増加したと報告している。

一方，Conrad (1985) は，ＮＳ（native speakers of English）とＮＮＳを被験者とした音

声クローズテストの結果から，ＮＳは談話レベルの意味的な手掛りをもとに語の推測を行うのに対し，ＮＮＳは文レベルの統語的な情報に依存し，英語能力が低くなるにつれて表層構造への依存度は高まるとしている。また，Kelch（*op. cit.*）は，ＮＮＳによるＮＥの聴解において，統語上の簡略化は聴解を容易にする独立した要因とはならないが，発話速度との間に相互作用があると述べている。さらに Long（1985）は，ハワイ大学の留学生106名を対象にした聴解力テストの結果から，統語上の簡略化，発話の減速と明瞭な発音，言い換えや繰り返しなどの操作を施した 'foreigner talk version' はＮＮＳの聴解度を高めたと報告している。

以上の研究報告は，言語使用上の simplifications がＮＮＳの聴解に与える影響や，ＮＮＳの言語運用の特質を解明することを目的としている点で共通しており，注目に値する。

しかし，これらの実験結果は，ＮＮＳによるＮＮＥの聴解にどの程度応用可能なのであろうか。換言すれば，ＮＮＳによるＮＮＥの聴解は，ＮＥの聴解に比較して，どの点において特異あるいは同質なのであろうか。ＮＮＳによるＮＮＥの聴解に関して，Smith and Bisazza（1982：269）は，"...the assumption that nonnative students of English will be able to comprehend fluent nonnative speakers if they understand native speakers is clearly not correct." と述べて，ＮＥの聴解が必ずしもＮＮＥの聴解を助長するとは限らないことを示唆している。

以上の考察から，聴き取り易さを決定する要因には，主要なものとして，①発話速度，②統語的特徴と文法性，③音声的特徴，④使用語彙，⑤当該言語との親密度，⑥話題との精通度などが考えられ，ＮＮＥの聴解においては，①～③が重要と推測される。そこで，本研究では，ＮＮＳによるＮＮＥの聴解プロセスの特質を究明することを最終目標として，以下２種類の基礎調査を行った。

Ⅲ．調　査　Ａ

１．目　　的

３種類の英語の comprehensibility に対する感じ方を，「話題（内容）との親密度」，「発話速度」，「発音の明瞭度」，「全体としての聴き取り易さ」の４項目に関して，客観的尺度で比較する。

２．方　　法

〈資　　料〉

The English Journal（アルク，1984，1985）の付属テープの中から英語による対話部分を３箇所選定した。いずれも，ＮＳである interviewer とＮＳあるいはＮＮＳである interviewee の間で交された対話である。本調査に用いた資料は interviewee（SPEAKERS１，２，３）の発話部分の英語であり，各話者の母国語及び発話速度は表１に示すとおりである。

表１　母国語と発話速度

SPEAKERS	1	2	3
ENGLISH	ＮＥ	ＮＮＥ	ＮＮＥ
Ｌ１	American	Cantonese	Italian
WORDS	896	470	929
DURATION	5:21	3:16	6:00
RATE(WPM)	167.5	143.9	154.8

（以下，Ｓ１，Ｓ２，Ｓ３をもって各話者の英語を表わす。）

〈回答形式〉

5段階の単尺度による評定尺度を用いた。各項目の尺度値は以下に示すとおりである。

「話題（内容）との親密度」

5……とても親しみがある

4……どちらかというと親しみがある

3……どちらともいえない

2……どちらかというと親しみがない

1……とても親しみがない

「発話速度」

5……とても速い

4……どちらかというと速い

3……どちらともいえない

2……どちらかというと遅い

1……とても遅い

「発音の明瞭度」

5……とても明瞭である

4……どちらかというと明瞭である

3……どちらともいえない

2……どちらかというと不明瞭である

1……とても不明瞭である

「全体としての聴き取り易さ」

5……とても聴き取り易い

4……どちらかというと聴き取り易い

3……どちらともいえない

2……どちらかというと聴き取りにくい

1……とても聴き取りにくい

〈対　　象〉

松山商科大学人文学部社会学科1年生73名

〈実施時期〉

昭和61年7月12日

3．結　　果

χ^2検定による分析結果は以下に示すとおりである。

表2　話題（内容）との親密度

	1	2	3	4	5	計
実測値S 1	2	5	14	45	7	73
実測値S 2	2	14	30	24	3	73
実測値S 3	2	18	25	26	2	73
期待値	14.6	14.6	14.6	14.6	14.6	73

すべて$p < .005$で有意

表3　発話速度

	1	2	3	4	5	計
実測値S 1	0	0	3	17	53	73
実測値S 2	1	10	27	30	5	73
実測値S 3	1	6	15	36	15	73
期待値	14.6	14.6	14.6	14.6	14.6	73

すべて$p<.005$で有意

表4　発音の明瞭度

	1	2	3	4	5	計
実測値S 1	9	31	20	11	2	73
実測値S 2	0	10	9	37	17	73
実測値S 3	8	35	11	18	1	73
期待値	14.6	14.6	14.6	14.6	14.6	73

すべて$p<.005$で有意

表5　全体としての聴き取り易さ

	1	2	3	4	5	計
実測値S 1	35	31	7	0	0	73
実測値S 2	4	14	14	36	5	73
実測値S 3	15	33	10	11	4	73
期待値	14.6	14.6	14.6	14.6	14.6	73

すべて$p<.005$で有意

4．考　察

表2～表5に示したとおり，いずれの英語も4項目すべてに対する感じ方に一様の偏りが観察された（$p<.005$）。「発話速度」に対する感じ方は，S 1＞S 3＞S 2の順で速いと感じている。これは各々の実際の発話速度の順位（S 1＝167.5＞S 3＝154.8＞S 2＝143.9WPM）と一致しており，被験者の聴取の正確さを証明している。一方，「発音の明瞭度」と「全体としての聴き取り易さ」に対する感じ方は、どちらもS 2＞S 3＞S 1の順位で明瞭であり，聴き取り易いと感じている。この順位は上述の発話速度と逆の順位であり，発話速度が聴解における重要な要因であることを裏付けている。さらに，S 1がS 2やS 3よりも聴き取りにくいと感じているのは，同化，脱落，連結，弱化などの音声変化が聴解を困難にしたと推定できる。また，「話題（内容）との親密度」において，S 1が最も親しみがあると感じているのは，S 1がテレビの人気番組に関する言及であるためと推測される。

Ⅳ．調査B

1．目　的

英語の差異がNNSの聴解に影響を及ぼす要因となりうるか否かを，2種類のテストの結果から考察する。

2．方　法

〈資料〉，〈対象〉，〈調査時期〉はすべて調査Aと同じ。

〈テスト形式〉

本調査における聴解テストは，multiple-choice listening comprehension test（ＬＣ）と combined cloze and dictation（ＣＤ）（Oller，1979）の２種類で構成されている。[注1] 前者は，ある一定の長さの英文を聴いた後，その内容に関する質問の答えを４つの選択肢の中から１つ選ぶ多肢選択式客観テストである。[注2] 本調査の資料は会話であるため，質問文の内容は，当該話者の発話部分のみに限定し，interviewer の発話あるいは話題との精通性からは解答が推測できないよう配慮した。また，質問文は英文で与えたが，聴解力そのものを測定するという目的から，まず被験者に質問文を読ませ，続いて，質問文すべてについて口頭で説明を加えた。後者は，標準クローズテストの完全な英文を聴きながら，問題文の空所を書き取っていく形式の音声クローズ法である。[注3] 本調査では，語の削除率は９語ごととし，採点には正語法を用いた。尚，調査手順は，調査Ｂが調査Ａに先行している。

３．結　果

各テストの平均値，標準偏差，Ａ×Ｓ型要因配置による分散分析及びｔ検定の結果は以下に示すとおりである。

表６　平均値と標準偏差

	MEAN	ＳＤ
ＬＣ１	4.52	1.87
ＬＣ２	2.71	1.97
ＬＣ３	6.44	2.47
ＣＤ１	.96	1.03
ＣＤ２	7.03	1.94
ＣＤ３	5.01	2.03

表７　分散分析表（ＬＣ）

変　動　因	ＳＳ	ｄｆ	ＭＳ	F_0	F
英語間（Ａ）	506.92	2	253.46	60.20	p<.01
個人間（Ｓ）	378.71	72	5.26	1.25	ns
残　差（ｅ）	606.44	144	4.21		
全　体（ｔ）	1492.07	218			

表８　平均値の差の検定

英　語	Ｓ２	Ｓ３
Ｓ　１	4.52～2.71***	4.52～6.44***
	Ｓ２	2.71～6.44***

***p <.001

表９　分散分析表（ＣＤ）

変　動　因	ＳＳ	ｄｆ	ＭＳ	F_0	F
英語間（Ａ）	1394.86	2	697.43	317.01	p<.01
個人間（Ｓ）	335.00	72	4.65	2.11	p<.01
残　差（ｅ）	316.81	144	2.20		
全　体（ｔ）	2046.67	218			

表10　平均値の差の検定

英　語	S 2	S 3
S　1	.96～7.03***	.96～5.01***
	S 2	7.03～5.01***

*** p ＜.001

4．考　察

表7より，multiple-choice listening comprehension testの得点間に有意差（F＝60.20，df＝2/120，p＜.01），表9より，combined cloze and dictationの得点間に有意差（F＝317.01，df＝2/120，p＜.01）がそれぞれあることと，表8，表10より，各テストの平均値間にも有意差（p＜.001）があることが判明した。従って，要因A，すなわち，英語の差異（話者の母国語）が主効果として働いたことが検証された。また，CDの得点順位（S 2＞S 3＞S 1）が，調査Aの「発音の明瞭度」と「全体としての聴き取り易さ」の2項目における順位（S 2＞S 3＞S 1）と一致しており，この順位が実際の発話速度と逆の順位になっていることから，発話速度が重要な要因であることが再度確認された。一方，調査Aにおいて，「話題（内容）との親密度」が最も高かったS 1は，LC，CDのいずれのテストにおいてもS 2，S 3より下位得点を示したことから，本調査に関する限り，「話題（内容）との親密度」は必ずしも聴解を助長する要因ではないと推測される。

V．結　語

今回の調査から，以下2つのことが判明した。第一点は，英語の差異はNNSの聴解に影響を及ぼす要因となりうることである。しかし，英語の差異には，個々の変種の音韻レベルや統語レベルにおける様々な言語特性が含まれているので，さらに緻密な調査が必要である。第二点は，発話速度は発音の明瞭度と全体としての聴き取り易さに対する感じ方と密接な関係にあり，NNEの聴解においてもNEの場合と同様に，発話速度が聴解上重要な役割を果たしていることである。すなわち，本調査の対象となった日本人大学生は，発話速度の速いNEを，それよりも発話速度の遅いNNEに比べて発音が不明瞭で聴き取りにくいと感知し，実際の聴解度においてもNEの理解度はNNEのそれよりも低いことが確認された。

以上の結果から，国際共通語としての英語の教授過程においては聴解訓練の多様化が不可欠であり，とりわけ，様々な英語に接触する機会を増加させ自然な発話速度に習熟させる必要があるといえよう。

最後に，本調査はテスト項目が少ないなど諸条件の統制に不備があり，調査方法の改善を次稿の課題としたい。

注

1）紙面の都合上実例は割愛した。
2）項目数5で10点満点。
3）項目数10で10点満点。

引用・参考文献

アルク (1984) "Improving Inter-Asian Ties in Three Languages," *The English Journal*, 14, 5, May, 126−129.

_____ (1984) "Holding Your Weight With the Big Names." *The English Journal*, 14, 11, October, 100−104.

_____ (1985) "An Italian Breaks Into Japanese Show Business," *The English Journal*, 15, 6, June, 102−106.

Boyle, J. P. (1984) "Factors Affecting Listening Comprehension," *English Language Teaching Journal*, 38, 1, 34−38.

Chaudron, C. and J. C. Richards (1986) "The Effect of Discourse Markers on the Comprehension of Lectures," *Applied Linguistics*, 7, 2, 113−127.

Conrad, L. (1985) "Semantic Versus Syntactic Cues in Listening Comprehension," *Studies in Second Language Acquisition*, 7, 1, 59−72.

Flaherty, S. E. (1979) "Rate-Controlled Speech in Foreign Language Education," *Foreign Language Annals*, 12, 4, 275−280.

Gass, M. S. and E. M. Varonis (1984) "The Effect of Familiarity on the Comprehensibility of Nonnative Speech," *Language Learning*, 34, 1, 65−89.

_____ and C. M. Madden (eds.) (1985) *Input in Second Language Acquisition*. Newbury House Publishers, Inc.

Kelch, K. (1985) "Modified Input as an Aid to Comprehension," *Studies in Second Language Acquisition*, 7, 1, 81−90.

Long, M. H. (1985) "Input and Second Language Acquisition Theory," Gass, S. M. and C. M. Madden (eds.) (1985 : 377−393)

町田隆哉 (1979) 「発話速度の聴解度に及ぼす影響」『英語教育』大修館書店, 27, 12, 2月号, 26−28

Oller, J. W., Jr. (1979) *Language Tests at School : A Pragmatic Approach*. Longman Group Ltd.

Smith, L. E. and J. A. Bisazza (1982) "The Comprehensibility of Three Varieties of English for College Students in Seven Countries," *Language Learning*, 32, 2, 259−269.

竹蓋幸夫 (1982) 『日本人英語の科学』研究社出版.

Varonis, E. M. and S. Gass (1985) "Non-native / Non-native Conversations : A Model for Negotiation of Meaning," *Applied Linguistics*, 6, 1, 71−90.

拙稿 (1986) 「大学一般教育課程における英語教育のカリキュラム編成について−国際共通語としての英語という観点からの教材開発−」『広島大学教科教育学会会報』広島大学教科教育学会, 第21号, 10−19.